

択捉島 ビザなし交流訪問 に参加して

2017 年 6 月 8 日～11 日

「平成 29 年度第 2 回 北方四島交流訪問事業（一般：択捉）」の団員の一人として橋本が参加しました。訪問団は北村信人氏を団長に 60 名。橋本は、択捉島はもちろん北方四島への訪問自体がはじめてです。

出発の 8 日は朝から雨と風の吹く大変に寒い中、大勢の方が見送って下さいました。しかし風が安全に航行できる基準を超えていたので、この日は根室沖に停泊し、天候の回復を待って、翌朝出発となりました。

出発した 9 日の夕方ごろに国後水道を抜けます。そして択捉島の姿を大きく目で見たときはとても感動しました。間近に迫る山々、特に阿登佐岳とその奥に見える択捉島最高峰の西単冠山、そして遠く正面に散布山が映る風景は、印象が知床や国後島ともまったく違う姿のように思えました。

こうした雄大な自然を生かしたクルーズでも十分な観光資源になるのではないかと思われます。なお「えとぴりか」のスタッフさんのお話では、このように波が穏やかで、しかも霧がかからずきれいな風景が見えるのは、自分たちも年に 1 回あるかどうか、という話でした。

択捉島での歓迎セレモニーで挨拶をおこなった現地の地区長は、共同経済活動について「択捉島は観光資源として多くのポテンシャルを持っている。素晴らしい自然、多くの名所、温泉…。観光の発展はサハリンの重要

な計画となっている。昨日はクルーズ船の訪問がありアメリカやイギリスなど 50 名の海外からの観光客が訪れた。その中には 7 名の日本人が含まれている」と述べました。

択捉島の住民の方々とグループワーク形式の意見交換会が行われました。意見交換に参加した現地の博物館館長さんは、「日本の博物館は分かり易く、すばらしい。日本の技術や知識を学びたい」とのべました。

また択捉島の生活で困難を感じることもあるか、という質問に対して、「大陸から遠いため飛行機の移動は天候の影響を受けやすい。しかし道路・港湾・文化会館や食糧事情なども以前より良くなってきた。また以前は電化製品など島で買うことが難しかったものについても、今はインターネットを利用して世界中から手に入るようになった。住宅建設も進み住環境も改善されてきている」と答えました。

同じグループに参加した元色丹島民方は、「私は色丹島に 13 歳まで住んでいた。択捉の素晴らしい景色を見て、子どものころを思い出して胸がいっぱいになった。ふるさととは本当に良いとおもう。私にとっても、あなたにとってもここは大切なふるさと。一緒に手をつないで、お互い話し合ってやっていくことが大切だ」とお話されていました。

郊外の「紗那日本人墓地」は日本人の墓碑のすぐそばに柵が張られており、ロシア人のお墓が近接して建てられている状態でした。訪問団のある方は妻の実家のお墓を去年ようやく発見することが出来たと。この他にすでに掘られた名前も読めず、墓石が倒れかけた状態のものもありました。

しかしこの紗那墓地はまだ「日ロ混住」のため、整備された墓地とのことです。四島には草木に覆われて発見するのが大変な墓地も相当数あるそうです。またそもそもどこにあるのかわからない、道がない、クマが出るため墓地まで行けない等の状況もあり、墓参のための道路など環境の整備はやはり必要と感じました。

ホームビジットでは毎回、日本訪問団のホームビジットを受け入れて下さっている方ですが、今回はご自宅が改装中とのことでレストランに招待をいただきました。7 歳のお孫さんが一緒です。

今は退職されて年金生活ですが、ご自分を行政で予算を執行する立場だったと述べていました。過去と現在の島民の生活の様子、巨大水産企業のギドロストロイが択捉島の住民の生活の安定に大きな役割を果たしていることを的確に説明していました。

また共同経済活動についても、択捉島における観光振興に期待をもっていること、またその一方で自然環境を守る観点からごみ処理施設の必要性を感じており、そうした施設の建設に日本の技術を期待していることを述べていました。

また「私たちは日本からこれまで受けてきた人道支援に対してとても感謝している。東日本大震災のとき、少しでもそのお返しをと思い、寄付を島民から募り贈らせてもらった」とお話しされていました。

心のつながりとはこういうことか、と感じたお話でした。

その後、幼稚園の視察、市街地散策、夕食交流会などをへて、択捉島でのプログラムは終了しました。

今回参加し、はじめて間近に見る島の姿やロシアの方との交流でした。

根室市に暮らしていて、知識として読んだり聞いたりしてはいても、実際に体験することが本当に大切なことと改めて感じました。

また船の中や現地などで、元島民の方や様々な立場の方から、いろいろなお話を伺ったことも大変勉強になりました。

ある元島民の方はホームビジット先で、自分が暮らしていた土地の近所に住んでいた方とお会いすることが出来た。今回の訪問で目標としていた新しい友達をつくることができた、とよろこびました。

また、元島民 2 世と 3 世で参加された親子は、返還運動に参加することに現在の職場

が大変に理解をして下さっていることをお話しされました。

昨年、墓参や自由訪問でロシア人側の都合で中止等が相次ぎました。その方が参加した墓参のときも、根室を出港してからも四島側と手続きのやり取りが続き、2 度 3 度状況が変わって、島に上陸できるか、このまま根室に戻るのかという緊迫した事態になっていた、当時の様子を話されました。結果として島に上陸することが出来たそうですが、上陸が決定した時の高齢の元島民の方の表情が忘れられない、と言います。

歴史・文化の専門家交流で参加された方は、今回の遺跡調査では縄文時代(?)の遺跡を発見することができたこととお話されていました。島には遺跡はたくさんあり、1 日に 5-6 か所発見されることもあるそうです。ただしこの次に択捉島に来ることが出来るのは来年で、本当はもっとじっくり時間をかけて調査をしたい、とお話されていました。

また開発が進むことでそうした貴重な遺跡が損なわれることを危惧されていました。

本当の意味で自由な訪問が出来る状況になることが、こうした学術研究の分野からも期待されています。

今回の訪問では、それぞれの方が、いろいろな思いをもって島への訪問をおこなっていることを、教えていただきました

領土問題の啓発という観点からも、ぜひできるだけ多くの方がこのように訪問できる状況になることが必要と考えます。

またビザなし訪問では参加者それぞれの知識や理解に差があるため、事前や船中の研修をさらに充実させていくこと、そして参加者同士のグループワークなどでしっかりとお互いを感じたことや意見を述べ合い、認識を高めていくような取り組みも必要と思いました。

今回参加させていただいて、ありがとうございました。

この経験を今後の活動にもしっかりと活かしていきたいと思えます。

(文責；橋本竜一)